

天草版平家物語における打消推量・打消意志の助動詞

—資料性との関わりを中心として—

矢島 正浩

(国語教室)

一、はじめに

中古和文の散文資料における打消推量・打消意志の助動詞は、ジ・マジが一般的であり、両者は意味用法の点及び使用される文体などにおいてそれぞれ異なる特性を持つとされる。⁽¹⁾ 続く中世の口語資料においてはジが次第に衰退し、マジもマジイ・マイに語形を変えて使用されるに至り、近世前期にはそのマジイも口頭語から姿を消し、マイに一本化されていく。⁽²⁾⁽³⁾

中世後期の口語資料とされる天草版平家物語においては、打消推量・打消意志の表現としては主としてマジイ及びマイが用いられ、ジ・マジの使用は極めて少ない。古代語的表現のジ・マジから近代語的表現のマジイ・マイへの交替のまさに完了期の様相が呈されるといえる。このマジイ・マイは次に示す通り、天草版平家物語ではほとんど同じような用いられ方をする場合がある。

- ・三位入道は八十になって軍をして右の膝口を射させて、今はかなふまじいと思はれたか、自害をせうとて(Ⅱ・一三二・6)
- ・行家はかなふまいと思はれたか、木曾にすって違うて丹波路へ

かかって播磨へ下らるれば、

(Ⅲ・二一七・3)

本稿では、このように天草版平家物語において極めて近い用いられ方をするマジイ・マイに着目し、それぞれがどのような存在理由を持ちながら並存していたのかということを考察してみようとするものである。

ところで中世口語資料に現れるマジイ・マイの並存に関しては、既に先学により注目され、研究が進められている。この問題に関する従来の研究の主たる関心はマジイ・マイの表現性の相違を明らかにすることであり、その成果として、これらの助動詞の並存の意義がかなり明確にされてきたといえる。但し、諸氏による見解は必ずしも統一的な段階にまで至っていないといえるようである。

例えば此島(一九七三)では「(マジイとマイの間に)意義用法の差は見られない」とされるが、小林(一九八七)では「マイの変化形マジイは、狂言では、名のりや改まった場面での使用が目立ち、マイよりは発話者の強い意志・決意・推定の姿勢がうかがわれる」という見解が示される。マジイの方が強くはっきりした表現態度にて用いられるという考え方である。また出雲(一九八七)では、共

起する副詞、上接する語の違いを明らかにして、更に同じ終助詞を伴う例の意味差などを考察された上で、「マイが待遇的な顧慮の少ない、日常語的なストレートな表現の語であったとみられるのに対し、マジイはより控えめで、丁重で、含みの多い表現の語として用いられたといえる」という認識を導き出している。小林氏とは若干異なり、マジイには控えめで丁重な表現性を見出している。

表現性といった一例ずつに注目していく必要のある問題については、視点、解釈の際の重点の置き方によってそれぞれの見解は微妙な食い違いを生じやすい。従って表現性のような無形の特徴を問う場合にも、極力客観的な事実に基づく分析が必要になると思われる。

また、特に天草版平家物語（以下「天平家」と略す）を対象とする際には、そこに現れる言語事情を一括して扱うことには慎重でなければならぬとされる。すなわち、「天平家」は、言語資料として必ずしも全巻を通じて等質なものではなく、例えば極めて似通った意味や用法を表す二表現形式が「天平家」に両用されるような場合に、巻ごとによっていずれの表現が多用されるかが異なるというような傾向が現れる場合があるのである。⁽⁴⁾ 従って、マジイ・マイの並存を検討する際にも、その視点からの考察が不可欠と考える⁽⁵⁾。

「天平家」のマジイ・マイの問題を扱うに際し、このように従来の研究が主として表現性の解明に重点が置かれてきたということと、「天平家」が特異な資料性を有するということを踏まえる必要がある。これらの事情を鑑み、本稿ではできる限り客観的・実証的な態度で検討を行うことを重要視し、なおかつ「天平家」の有する資料性についても配慮することによって、両語の使い分けに関して改めて考察を試みてみる。

ところで、「天平家」とは、平家物語の口訳本ともいうべきキリスト教宣教師用の日本語教科書である。その成立事情から、検討に際しては、「天平家」での使用状況を、その口訳の際に関与した平家物語（以下、「古典平家」あるいは「原拠本」とする）ではどのような表現によって言い表されていたのかという対応関係から見えていく必要がある。原拠本に関しては、清瀬（一九八二）に従い、以下の諸本を用いることとした。⁽⁶⁾

・「天平家」巻Ⅰ～Ⅱの１章：寛一本（龍谷大学本）。日本古典文学大系「平家物語」を使用。⁽⁷⁾

・「天平家」巻Ⅱの２章～Ⅲの８章および巻Ⅳの２章～巻Ⅳ28章：百二十句本（斯道文庫本）。『百二十句本平家物語』（汲古書院）を使用。

・「天平家」巻Ⅲの９章～13章および巻Ⅳの１章～平松家藏本および竹柏園本（天理図書館蔵）。

*引用は例の冒頭に（底本名）、末尾に（巻・頁・行）で示す。

なお、「天平家」が右のような資料的特質を持ち合わせていることから、「天平家」を用いた言語調査の場合には、大きく分けて二つの立場からの解釈が可能となる。一つは「天平家」のもつ言語資料としての特質に重点を置き考察する立場であり、もう一つはその特質とは一応無関係に、中世後期語の一つの反映の在り方として「天平家」を捕え、資料に現れるマジイ・マイの使用例を全情報の対象として考察する立場である。もちろん両者は不可分の関係にあり、最終的には統一的に解釈されなければならないのであるが、そこに至る手順としては、二つの立場の混同を避け、別々に分けて扱っていく必要があると考える。本稿は、その前者、すなわち「天平家」の資料性に重点をおいた立場の解釈について述べる。後者、すなわち

純粹に資料に現れる言語事情に注目することに重点をおいた考察は別稿（「天草版平家物語におけるマジイ・マイの用法」『国語国文学報』第51集）にて扱う。従って、その稿と本稿を合わせて一つの論になるということをも最初に断わっておく。

テキストには大英図書館蔵「天草版平家物語」（勉誠社文庫7・8影印本）を用いる。翻字にあたっては江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院）を参照する。引用は（巻・頁・行）の順で示す。「天平家」の序文は、本文とは明らかに異なる文語体で書かれているので今回の対象からは除く。

二、打消推量・打消意志助動詞の使用状況

まず、「天平家」における打消推量・打消意志の助動詞の使用状況を概観しておく（推量+否定）のように複数の語による表現は除く）。殊に推量・意志表現の場合、地の文と心話文との区別が明瞭でないこ

表 1

| 計 | 地・心話 | 会話 | | |
|------------|----------|------------|----|-----|
| 11 | 3 | 8 | 終止 | ジ |
| 1 | 1 | | 連体 | |
| 2 | | 2 | 終止 | マジ |
| 3 | | 3 | 連体 | |
| 61 | 11 | 50 | 終止 | マジイ |
| 19 (8) | 8 (2) | 11 (6) | 連体 | |
| 65 | 20 | 45 | 終止 | マイ |
| 19 (12) | 1 | 18 (12) | 連体 | |
| 4 (3) | | 4 (3) | 已然 | マケレ |
| 185 | 44 | 141 | 計 | |

表中括弧内は言い切り部分に用いられる例数（内数を表す）

とが多いので、表では地の文と心話文とを一括して示した（表1）。表にも明らかな通り、「天平家」の打消推量・打消意志の助動詞はジ・マイとマジ系があり、活用形は終止形・連体形・已然形に限られる。連体形の例は、約半数（マジイ八例・マイ一二例）が終助詞を伴って文末で使用されるものであり、已然形の例の大部分（四例中三例）も、係助詞コソの結びである。従って語形の別を問わずほとんど（全一八五例中一六二例、八七・六％）が文末で使用されていることになり、これらの助動詞の多くが、「天平家」では辞的なものとして使用されていた様子が窺われる。

以下、終止形、及び連体形のうちでも終助詞を伴って文末で用いられるものを合わせて「言い切り形」とする。本稿では、この「言い切り形」のマジイ・マイを最初に問題としていく。

なお、表より従来の打消推量・打消意志の助動詞の語形であったジ・マジの例はあまり多くなく、その用法が衰退の途にあったことが推定される。また、マジイ・マイの連体形のうち、文末で用いられるのではない用法例、すなわち体言を修飾したり準体言として用いられる例も全用法例からみると少数派である（マジイ一一例・マイ七例）。これらの用法例の使われ方に関しては後でまとめて述べる。

三、巻別使用状況

ここでは「天平家」の資料性との関わりを調べるため、マジイ・マイの言い切り形の用例数を巻別に集計し、その用例数の分布が意味するところを考えてみる。

先に触れた通り、「天平家」の言語面での巻別の特性については既に研究が行われている。清瀬（一九六八）では二分説が示され、小

池（一九七三）では三分説（小池①説とする）が主張された。清瀬説では、「古典平家」での表現が「天平家」にて別語に置き換えられたもの、または新たに付加された表現を取り上げられ、その表現例の分布を明らかにされている。一方の小池①説は、サムライとサブライという同語異形の言語形式に注目し、それを巻・章別に使用比率を調査されて、その分布の持つ意味を検討されたものである。それぞれの説で主張される範囲とその分布の有する特性を私にまとめると次のごとくである。

・清瀬説：「天平家」巻Ⅳの1章まで・巻Ⅳの2章以降の二分説
前半は口語性が高く、後半は文語性が高い

・小池①説：「天平家」巻Ⅱの2章まで・巻Ⅱの3章―巻Ⅳの2章まで・巻Ⅳの3章以降の三分説
前・後部分にサムライが多く、中間部分にはサブライ

が使用される（ABA型を示す）

小池氏は更に格助詞ヨリ・カラという文語的か口語的かという対立的性質を持つ類似の表現を取り上げ、「天平家」における使用状況の巻別分布を明らかにされ、小池（一九七六）にて論じられた（小池②説とする）。伊藤（一九七八）でも、「御」「出」の読みを対象とされ、ほぼ同様の調査結果が導き出されている。小池②説・伊藤説の要点を抜き出す。

（古い語形と新しい語形とを使用率で比較した場合）

「天平家」巻Ⅰ…古い語形を高率で使用

〃 巻Ⅱ…古い語形の使用率が高いが漸減

〃 巻Ⅲ…古い語形の使用率が最低

〃 巻Ⅳ…巻Ⅲよりも古い語形の使用率が微増

いずれも次元の異なった言語事情を問題とし、立脚点・方法を異

にする考察であるため、単純に一括して扱うことは避けなければならない。ただ、いずれの説も「天平家」の言語面の事実に基づく論であり、それぞれの調査結果は尊重される必要がある。捕えられた言語事情はそれぞれ違った傾向を示しているが、どこで境界線が引かれるかという観点に関しては、ほぼ同一の方向においてまとめることができようである。すなわち清瀬説の前半部分を更に二つに分けることができるとしたものが小池①説であり、小池②説・伊藤説は、小池①説において中間部分とされる箇所を更に二つに分けて見る立場であるということができよう（小池②説・伊藤説は巻毎に区切る方法であり、やや異なる）。従って、各説において示される言語的事実は、全く偶然的で無関係な事柄ではなく、それぞれ有機的な連関性を有する状況だと考えられる（なお、各説に示される個々の事態は統括的に解釈しにくいが今はひとまず問わない）。

これらの先学によって示される見解に基づき、「天平家」の巻を何種類かに範囲分けを行い、マジイ・マイの用例数の分布の意味について考えてみる（表2参照）。

まず全体としては、マジイにおいて特に巻別の偏在が著しく、前半部は一部を除き概して使用数が少なく後半目立って増加すること、マイは全巻を通じほぼ一定の使用がある（後半の一部を除く）こと等が見て取れる。その結果、巻Ⅰ―巻Ⅳ10章までは概してマイが優勢で、巻Ⅳ10章以降はマジイが多用されるという傾向となって現れる。

このように表に現れた分布の状況が、全くの偶然から生じたものなのか、それとも何等かの意味を有するものなのかを検証するために、以下先学の諸研究において示された見解と比較していく。

「天平家」を二分する清瀬説に基づき集計した例数には、前半部

表 2

| 古典平家 | | 天 平 家 | | 章 | | 別 | | 清 瀬 説 | | 小 池 ① 説 | | 小池②伊藤説 | |
|---------------------|----|-------|------------------|-----|----|-----|----|-------|----|---------|----|--------|----|
| 底本 | 巻 | 巻 | 章 | マジイ | マイ | マジイ | マイ | マジイ | マイ | マジイ | マイ | マジイ | マイ |
| 覚 一 本 | 一 | I | 1～3 [△] | 1 | 1 | 22 | 44 | 17 | 21 | 11 | 12 | | |
| | 二 | | 3～9 [△] | 10 | 4 | | | | | | | | |
| | 三 | | 10～12 | 0 | 7 | | | | | | | | |
| | ○ | | 1 | 5 | 9 | | | | | | | | |
| 百 二 十 句 | 四 | II | 2～8 | 2 | 4 | | | 6 | 28 | 8 | 17 | | |
| | 五 | | 9～10 | 1 | 4 | | | | | | | | |
| | 六 | III | 1 | 0 | 3 | 3 | 14 | | | | | | |
| | 七 | | 2～8 | 3 | 9 | | | | | | | | |
| 平 竹 | 八 | | 9～13 | 0 | 2 | | | | | | | | |
| | | | 1 | 0 | 1 | | | | | | | | |
| 百 二 十 句 | 九 | IV | 2～10 | 13 | 21 | 47 | 33 | 46 | 28 | 47 | 34 | | |
| | 十 | | ママ 10～15 | 12 | 2 | | | | | | | | |
| | 十一 | | 16～20 | 10 | 6 | | | | | | | | |
| | 十二 | | 21～28 | 12 | 4 | | | | | | | | |
| | | | (小計) | 69 | 77 | | | | | | | | |

分にはマジイが少なくマイが多いのに対し、後半部分ではその使用比率が逆転する様が見れる。清瀬二分説の前半部対後半部を「天平家」の頁数でみると二二五対一八〇頁（1対0・8）であり、マイ

の用例数の分布（四四対三三＝1対約0・8）に限るとほぼ均等に使用されていることになる。一方のマジイはその頁数を考慮すれば、後半部での使用率の高さは歴然とする（二二対四七＝1対2・1）。マジイとマイを歴史的にみると、マジの連体形マジキの音便形からマジイが生じ、それが更にマイになったといわれている（橋本（一九六九）他）。マジイに古形ゆえの文語性があるとすれば、清瀬氏による二分説の解釈、すなわち前半部分が口語的で後半部分は文語的という言語事情が反映されていると考えることが可能となる。ただ清瀬説は、新語形対旧語形の調査によるものではなく、また使用例の偏在も極めて明瞭な分布を示すものであり、この調査結果とはやや意味合いが異なる点は注意を要する。

また小池①説による三分説に従った集計によれば、最初の部分ではマジイとマイは拮抗し、中間部分ではマイが圧倒的に多く、最後の部分ではマジイが多いという傾向が捕捉される。小池①説で示された分布が明瞭なABA型であったことと比較すると、概して似た分布型を示すとはいえず、マジイ・マイに関しては完全に同様の分布の偏在を示すとはいえず、マジイ・マイは、小池①説で取り上げたサムライ・サブライとは次元の異なる言語の対立形式であるゆえかとも考えられる^①。

次に小池②説・伊藤説によった場合である。マジイを古語形、マイを新語形とすれば、巻Iから巻IIIへとマジイの使用比率が減少している点で、小池②説・伊藤説に示された状況と同様の傾向が見て取れることになる。ただし、巻IVでのマジイの使用率は著しく高く、この点はやや傾向が異なる。

以上、「天平家」のマジイ・マイの使用数を巻別に揃えてみた。それらの分布がその他の言語事情の分布とも相関性を持つ有意なもの

であることを裏付けるために、諸先学の示された区分に従って、それらの見解との比較を行ったのである。その結果、いずれの説とも大きく食い違う傾向を示すことはなく、基本的には同様の意味を持った分布の様を示すことが確認された。従ってマジイ・マイの示す巻別の偏在は、「天平家」の資料性を反映している部分があると考えて良いと判断される。但し、どの説とも完全には同様の傾向を示すわけではなかった。よって同時に、このマジイ・マイの問題を扱う場合には、資料性という観点だけから説明できる範囲には限界があるという可能性を考えておかねばならない。ここではまとめとして次の二点を記しておく。

・「天平家」におけるマジイ・マイの使用については「天平家」の言語資料としての性質から説明される部分があること

マジイ：前半は一部分を除き使用数が概して少なく、後半（巻IVの2章以降）は著しく使用数が増す

マイ：一部を除き全巻を通じほぼ一定の割合で使用される（但し、後半やや減少する）

・文献の資料性という観点以外にも関与する条件を考える必要があること

なお、清瀬説による二分説に従うと特にマジイの偏在の特性を捕えやすい。以下の考察においても「天平家」を前半と後半とに二分する際にはこの二分説に従った分け方を用いるとする。

四、古典平家物語との対応

本節では、マジイ・マイの各用例が、原拠本である「古典平家」ではいかなる語と対応しているかということについて考察する。

「天平家」の資料性との関わりを明らかにするため、巻毎にその対

応関係を集計した結果を表で示す（表3・4）。

表に現れた状況を全体的に捕え、マジイ・マイの原拠本における対応語の種類についてみる。いずれの語においてもマジ・マジ系・ジに対応するものが中心である。特にジと対応する例が多く、マジイ・マイのいずれにおいても約半数を占める。先に、「天平家」にはジが少数例しか見られないことを述べたが、この調査結果と合わせると、ジが衰退し、その用法をマジイ・マイが代わりに担うに至ったことが明白である。

また、特にマジイとマイとの間では、「古典平家」における対応語

表3 マジイ（言い切り形）対応語別用例数

| 古典平家 | 底本 | 巻 | 天平家 | 章 | 対 応 語 | | | | | 計 |
|------|------|---|-----|------------|-------|----|----|---|---|----|
| | | | | | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | |
| 覚 | 一 | I | △ | 1～3 | | | | 1 | | 1 |
| | | | | △ 3～9 | 1 | 3 | 4 | 2 | | 10 |
| | | | | 10～12 | | | | | | 0 |
| | 本 | ⊖ | II | 1 | 1 | | 2 | 1 | 1 | 5 |
| | | | | 2～8 | | | 2 | | | 2 |
| | | | | 9～10 | 1 | | | | | 1 |
| | 百二十句 | 六 | III | 1 | | | | | | 0 |
| | | | | 2～8 | | 1 | 1 | 1 | | 3 |
| | | | | 9～13 | | | | | | 0 |
| | 平竹 | 八 | IV | 1 | | | | | | 0 |
| | | | | 2～10 | 3 | 3 | 6 | | 1 | 13 |
| | | | | マ 10～15 | 2 | 1 | 7 | 1 | 1 | 12 |
| 百二十句 | 九 | 十 | IV | 16～20 | 1 | 1 | 7 | 1 | | 10 |
| | | | | 21～28 | 2 | 1 | 7 | 2 | | 12 |
| | | | | (小計) | 11 | 10 | 36 | 9 | 3 | 69 |
| | | | | | | | | | | |

①マジイ
②マジ系…マジキ・マジク・マジケレ
③マジ系…ペン+否定・疑問+ベキ（反語）
④ペン系…ペン+否定・疑問+ベキ（反語）
⑤その他…カタシ・対応語なし

表4 マイ(言い切り形) 対応語別用例数

| 古典平家 | 底本 | 巻 | 章 | 対応語 | | | | | 計 |
|-------|---------|----|---------------------|-----|----|----|---|---|----|
| | | | | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | |
| 天 平 家 | 覚 | 一 | 1~3 [△] | | 1 | | | | 1 |
| | | 二 | 3~9 [△] | | 1 | 1 | 2 | | 4 |
| | | 三 | 10~12 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 7 |
| | 一 本 | ○ | 1 | 3 | 2 | 3 | 1 | | 9 |
| | | 四 | 2~8 | 3 | | 1 | | | 4 |
| | 百 二 十 句 | 五 | 9~10 | 3 | | | 1 | | 4 |
| | | 六 | 1 | 1 | | 1 | | 1 | 3 |
| | 平 竹 | 七 | 2~8 | 2 | 1 | 6 | | | 9 |
| | | 八 | 9~13 | | 1 | 1 | | | 2 |
| | 百 二 十 句 | 九 | 1 | | | | | 1 | 1 |
| | | 十 | 2~10 | 7 | 4 | 9 | | 1 | 21 |
| | | 十一 | 10~15 ^{ママ} | 1 | | 1 | | | 2 |
| | | 十二 | 16~20 | 1 | | 4 | | 1 | 6 |
| 天 平 家 | 百 二 十 句 | IV | 21~28 | 1 | 2 | 1 | | | 4 |
| | | | (小計) | 23 | 13 | 31 | 5 | 5 | 77 |

①マジ
②マジ系…マジキ・マジク・マジケレ
③マジ
④ベシ系…ベシ+否定・疑問+ベキ
⑤その他…カタシ・対応語なし

の相違に関しては目立った傾向の差が見られないようである。強いていうと、ややマイの方が原拠本のマジとの対応例が多いという程度である。但し、個別的な部分に注目すると、対応関係に若干の偏向が見られる。

例えば、「古典平家」のマジ・マジ系が「天平家」でマジイ及びマイに対応している例を、それぞれ巻の前半と後半(巻IVの2章以降)とに分けて集計してみる。するとマジイは前半対後半が七対一四、マイは二〇対一六で、マイがほぼ頁数比と同比(1対0・8)を示すのに対してマジイは後半への集中度が著しい(1対2)。つまりマ

イは原拠本の表現マジ・マジ系に対して巻の別を問わず一貫して同程度に対応していることを示し、マジイは後半において対応の度合いが際立って高くなるのである(ちなみにジとの対応関係においても全く同様の傾向が捕捉される)。

また、「古典平家」において推量の助動詞ベシを用いて表現されていたものが、「天平家」でマジイ・マイに置き換えられているもの(④の欄)に注目してみる。すると、マジイについては特に目立った傾向を示さないが、マイに関しては巻IIまでの前半部にしか存在しないということが分かる。「天平家」が前半部と後半部で口訳態度が異なるということを示す証左の一つと考えられる(この対応関係の例については後に再度触れる)。

以上は「天平家」のマジイ・マイに注目し、それと「古典平家」における対応表現についての観察であった。今度は焦点を変え、「古典平家」に現れる打消推量・打消意志の表現に着目し、それと「天平家」での対応表現をみる。

「古典平家」で打消推量・打消意志を表現するものには、マジ・ジの他に、ベシと否定語が併用されたり、(疑問詞+ベキ)の反語表現や(否定語+推量表現)によって表されたりするものがある。これらはいずれまでもなく必ずしも「天平家」においてマジイ・マイ(含、マジ・ジ)によって表現されるわけではない。例えば次のごとくである。

- (イ) (斯道本) 〈真海↓一同〉此ウ申セハトテ平家ノ方人スルト思召レ候マジ (巻四・二六九・11)
 〈真海↓一同〉これを申せばとて、平家の方人をするとな思はせられそ、 (II・一二二・6)
 (ロ) (覚一本) (地) 一日片時、人の命たえてあるべき様もなし。

(地) 一日片時^{いちじつへんし}も人の命たえてあらうずるやうもなかった。
(卷二・一八七・2)

(I・六〇・22)

(イ)は「古典平家」ではマジ・ジ系で表されていたものが、「天平家」では別の打消推量・打消意志の表現あるいは意識された表現が対応する場合のものである。(ロ)はそれに対し、古典平家でマジ・ジ系以外で表現されていたものが、「天平家」でもマジ・ジ系以外の表現が取られている場合のものである。これらの用例の使用状況を、巻別の分布という観点から調べてみる(表5)。

まず、(イ)の場合、すなわち古典平家ではマジ・ジで表現されていたものが、「天平家」ではその他の表現に置き換っている例である。これに該当する例は「天平家」の前半に多い。その傾向をより鮮明に把握するために、「天平家」の巻IVの1章までとそれ以降とに分けて用例数を集計する。すると前半が二三例、後半が二例となる。頁数では前半が全体の五割強であることを考えると、前半への該当例の集中度の高さは歴然としているといえよう。言い換えれば後半ほど、ジ・マジの、マジイ・マイと対応する度合いが高いということであり、逐語訳の態度が強まるということである。これは、先の「天平家」のマジイが後半の巻においてジ・マジ系との対応数が増すという結果と表裏をなす事柄であると考えられる。

次に(ロ)の、古典平家でジ・マジ系以外で表現されていたものに注目した調査についてである。

「古典平家」と「天平家」で同様の表現が用いられる逐語訳の例の分布について考えてみる。具体的には古典平家のヘビシ+ナシン<ベシ+ズ>が、「天平家」でそのままの表現で用いられているものである。これは表で明らかのように、「天平家」の巻IVに集中的に現

表 5

| (記 号) | | (イ) | | (ロ) | | | | | | (参考) |
|-------|--------------------|-----|-----|-----------|-----|----------|-----|-------|---|-----------|
| 古典平家 | | マジ | ジ | ベシ+ナシ | | ベシ+ズ | | ザリ+ベシ | | ベシ系 |
| 天平家 | | (他) | (他) | ベシ+ ナシ | (他) | ベシ+ ズ | (他) | (他) | | マジイ マイ |
| I | 1~ [△] 3 | 1 | 1 | | | | | | | 1 |
| | [△] 3~9 | | | 2 | 3 | | 4 | 1 | 3 | 4 |
| | 10~12 | 1 | | | | | 1 | 1 | | 1 |
| II | 1 | | | | 1 | | 2 | | | 2 |
| | 2~8 | 3 | 3 | | | | 3 | 1 | | |
| | 9~10 | 1 | | | | | | | | 1 |
| III | 1 | | | | | | | | | |
| | 2~8 | 1 | 1 | | 1 | | 1 | | 2 | 1 |
| | 9~13 | | 1 | | 2 | | 1 | | 2 | |
| IV | 1 | | | 1 | 1 | 1 | | | | |
| | 2~10 | | | 1 | 1 | 1 | 7 | 2 | | |
| | ^マ 10~15 | | 1 | 3 | | | 7 | | | 1 |
| | 16~20 | 1 | | 1 | | 2 | 3 | | 1 | 1 |
| | 21~28 | | | | 1 | | | 2 | | 2 |

れており、後半部への偏在が著しい(巻IIIまでに出現する例はヘビシ+ナシンでわずかに二例、ヘビシ+ズ>には例がない)。ここでも「天平家」の資料性について、後半部ほど逐語訳の態度が強まるという点が確認される。

ちなみに、先に掲げた表3・4の④には、「古典平家」でベシ系の表現が「天平家」においてマジイ・マイに置き換えられているものの例数を示した。表5の(参考)の欄にそれらの例数もマジイ・マイ合わせて再掲している。この項目についても、前半と後半で例数を集計すると一〇対四となる。頁数比を考慮しても「古典平家」のベシ系から「天平家」のマジイ・マイへと表現を変えるパターンのも、すなわち逐語訳的態度から外れる例は前半に多いということができよう(後半の四例はすべてベシ系からマジイに置き換えられたものである。マジイが後半にて急激に使用数を増すという事実と合わせて理解される事柄である)。

以上、「古典平家」の表現との比較を通して、次のことが指摘できた。

- ・マジイが原拠本のジ・マジ系に対応する場合の例は、特に「天平家」の後半(巻IVの2章以降)で多い。
- ・「古典平家」の打消推量・打消意志表現が異なった表現に置き換えられる傾向は、「天平家」の前半(巻IVの1章まで)において強い。

・「古典平家」の打消推量・打消意志表現が「天平家」で逐語訳的に用いられる傾向は、「天平家」の後半において強い。

右の見解を合わせることにより、次の見解が導き出される。

・マジイは逐語訳的な性格の強い部分で使用される度合いが高い。

五、ジ・マジ及び連体形マジイ・マイの巻別使用状況

本節では、打消推量・打消意志の助動詞のうち、ここまでの検討の対象から除外していたジ・マジの全用例、及びマジイ・マイのうち連体言・連体修飾の用法の連体形の用例について述べる。これら

は、打消推量・打消意志の助動詞の語形交替・辞的性格の強化の流れの中で、いずれも衰退の途にある用法例である。これらについても「天平家」の資料性との関わりから説明される部分が大きい。なお、本稿は資料性という観点で説明できる範囲を対象とし、意味に関わる部分は稿を改めるという方針であったが、ここで対象とするものは用例数が少ないので、必要に応じて意味的な側面についても言及する。まず、巻別の用例の使用状況を表で示す(表6)。

表 6

| | | ジ | | マジ | | | マジイ | マイ |
|-----|--------------------|----|----|----|----|----|-----|----|
| | | 終止 | 連体 | 終止 | 連体 | 已然 | 連体 | 連体 |
| I | 1~3 [△] | | | | | 1 | | 1 |
| | 3~9 [△] | 1 | | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 |
| | 10~12 | | | | | | | 3 |
| II | 1 | | | | 1 | | | |
| | 2~8 | | | | | | 2 | |
| | 9~10 | | 1 | | | | | |
| III | 1 | | | | | | | |
| | 2~8 | 1 | | | | | | |
| | 9~13 | | | | | 1 | | |
| IV | 1 | | | | | | | |
| | 2~10 | 3 | | 1 | | 1 | 2 | 1 |
| | 10~15 ^マ | 2 | | | | | 2 | |
| | 16~20 | | | | | | 3 | |
| | 21~28 | 4 | | | | | 1 | |

各語ごと、それぞれ異なった意味を持つ分布を示す。
まず終止形の例から述べる。

ジは終止形の一一例中九例が巻IVの2章以降に用いられる。ジを原拠本でみると、全例においてジが対応している。先に「古典平家」のジはほとんどがマジイ・マイに置き換えられることを述べたが、その点を勘案すると、ジに着目した調査においても、巻IVの2章以降は逐語訳的な性格が強い部分であることが確認される。なお、副詞ヨモを伴うことが多く(一一例中七例)、上接語にも偏りが見られる(「あり」・尊敬語など)など、表現にやや自由さを欠くということが指摘できよう。

・〈佐々木↓梶原〉御秘蔵のおん馬なれば、申すともよも下されじ、
何か苦しからうぞ? (IV・二三・23)

・(斯道本)〈佐々木↓梶原〉御秘蔵ノ御馬ナレハ申ストモ給ジ、
何カ苦シカルヘキ (巻九・四八二・1)

マジは二例と少なく、既に余り使用されなくなっていた用法であることが推定される。終止形ジと同様、上接語に特徴がある(「あり」・尊敬語)ということの他、いずれの例も「使い」を仲介にした表現で、実際の発話としての用法ではない。更に、意味も禁止・不可能といった話手の事態に対する否定的な態度が明白に示されるものに限られ、単純な推量・意志を表すのではない点が注意される。

・〈清盛↓資成(使い)〉それをば君も知らしめされまじと申せ
(I・二三・7)

・(寛一本)〈清盛↓資成(使い)〉それをば君も知らしめさるまじ
候と申せ (巻二・一五二・13)

(「法皇モ自分ノスルコトニ干渉ナサラナイダイタダキタイ」ト申セの意)

次に連体形の用例の現れ方についてである。

まず、ジとマジの連体形に注目すると、ジ・マジの終止形とはほぼ逆の分布が確認される。すなわち、当該例四例(ジ一例・マジ三例)のすべてが前半(巻IVの1章まで)に現れるのである。ジは本来辭的性格が強く、文末以外での使用はもとと多くない。マジも連体修飾の用法は一般的なものではなく、同時期に特有の過渡的な語形ではないかとされる。同用法の用例数の少なさは、その辺りの事情を物語っている。また、巻IIまでに偏在するという事実は、「天平家」の言語資料の性質が前半と後半で異なるという今まではしばしば指摘してきたことと重ねて理解される部分だと考えられる。ちなみに、連体形マジの用例に意味的な検討を加えると、いずれも話手の主観的な価値判断の加わった表現であり、終止形マジと同じく単純な推量・意志を表すものではないことが分かる。

・〈行綱↓盛国〉人づてに申すまじことぢや (I・二一・14)

・(寛一本)〈行綱↓盛国〉人伝には申すまじきことなり

(巻二・一五一・8)

成親の平氏打倒の計画に不安を抱いた行綱が、清盛に密告しようとする場面である。マジの表す意味は単純な意志というよりは否定的な義務・当為の意を表し、ある種の話手の価値判断が加わっていると考えられよう。なお、右の例にも示したように、原拠本で対応する語はすべてマジ類である。

続いてマジイ・マイの連体形についてである。この二語に関しては対照的な分布を見せる。マジイが後半(「天平家」巻IVの2章以降)に集中する(一一例中八例)のに対し、マイは前半に偏って現れる(七例中六例)のである。これらは意味的側面においてもそれぞれ特徴があり、その点を合わせ考えると巻別分布の傾向から外れる例も説明できる。

まず、連体形としてはマイ専用の観がある巻Ⅰに用いられるマジイの例を示す。

- ・〈宰相〉あはれ人の子をば持つまじいものぢや（Ⅰ・四〇・８）
- ・（覚一本）〈宰相〉あはれ、人の子をば持つまじかりけるものか
な（巻二・一六七・11）

娘婿である少将の命を救おうと清盛に嘆願し、漸くその訴えが認められた場面での発話である。連体形のマジ同様、否定的な義務・当為の意を表し、単純な推量・意志ではない点が注意される。連体形マジイには、このような意味を表す例が多い（一一例中七例。例外は巻Ⅳに集中する）。なお、原拠本で対応する語は、一例（ベカラズ）を除き、巻の違いに関わらずすべてマジ類である。

それに対してマイの例として、連体形の用法では圧倒的にマジイが多い巻Ⅳに現れた例を挙げる。

- ・〈畠山↓義経〉馬の足の及ぶまいところ三段にはすぎまい、
（Ⅳ・二三四・12）
- ・（斯道本）〈畠山↓義経〉馬ノ足ノ及ハサラン所三段ニハヨモ過シ
（巻九・四八四・2）

マイの連体形の場合は、原拠本での表現はマジ類に対応するのは二例であり、他は右の例のごとく〈否定語＋推量〉が対応している。意味も単純な推量・意志が多く、いわゆる婉曲表現と捕えられるものが中心である（七例中五例。例外はいずれも巻Ⅰに現れる）。

以上の検討の結果を簡単にまとめておく。

- ・終止形ジ：「天平家」の後半（巻Ⅳの2章以降）に集中。副詞を伴い、上接語が限定的であるなど表現に自由さを欠く。
- ・終止形マジ：上接語に限定あり。「使い」を介するなどして実際の

発話中のものではない。禁止・不可能の意を表す。
・連体形ジ・マジ：前半に集中。マジは話手の価値判断の加わった否定的な義務・当為を表すものが中心。

・連体形マジイ・マイ：マジイは後半に集中、マイは前半に集中。マジイは否定的な義務・当為を表すことが多く、マイは単純な推量・意志を表し、婉曲表現をなすことが中心。

なお、連体形マジとマジイは表す意味が等しく、使用箇所は相補分布をなす。

全体としては、各語ともに巻別の使用分布に偏在がみられ、使用箇所が限定されているという特徴を持つ。同時に、各語形それぞれの表す意味には傾向性があり、それによって巻別の分布により説明しにくい部分に現れる用例についても説明できた。要するに「意味・用法」と「文献の資料性」という両方の要素から考えることにより、これらの語形の並存の意義の説明が充足されることになる。

六、おわりに

本稿は、天草版平家物語に現れる打消推量・打消意志の助動詞マジイとマイという極めて近い用いられ方をする表現に着目し、その両語の存在意義について考察を試みたものである。「天平家」という資料の性格上、この文献の持つ資料性に重点をおいて両語の用いられ方を明らかにする方法と、使用例を全情報源として一つ一つの用例の有する表現性を考察する方法と両方向からの検討が必要であった。本稿はそのうちの前半部、すなわち「天平家」という資料ゆえに現れる現象部分を明らかにすることを目的とするものであった。全体のまとめは別稿の検討と合わせて行うとして、ここでは資料性

との関わりで明らかにされた点について改めて確認しておく。

マジイとマイとでは巻別の使用数の分布の仕方に大きな相違があった。特にマジイについては後半(及び前半の一部)の巻に際立って多く用いられるという傾向がみられる。これらの偏在を、先学による範囲分け及びそれに対するそれぞれの考察と比較することにより、マジイ・マイの使い分けには、「天平家」の有する資料性と少なからぬ相関性があるという見解を得ることができたのである。

この資料の特異性の現れとして、原拠とした「古典平家」での表現との対応関係の調査においても、様々な傾向が観察された。例えば、「天平家」の各打消推量・打消意志表現が、後半の巻において逐語訳的な対応関係をより強く示したことや、マジイは特に後半の巻において「古典平家」のジ・マジ系との対応例が著しく増加すること、延いてはマジイが、逐語訳の性格の強い部分での使用が多かったことなどである。それに対してマイは、マジイに比べて巻別の使用数の分布も、後半の巻でやや使用数が減じたこと等を除けば特別著しい偏りをみせず、また「古典平家」で対応する表現についても際立った傾向性を示さない。資料性という観点でみる限り、マジイとマイはその使用傾向において大いに異なっていたということになる。

ジ・マジ、連体形マジイ・マイは、用法としては衰退の途にあり、用例数も限られたものであった。各語とも巻別使用分布に著しい偏りがみられ、同時に表す意味もそれぞれ傾向性があり、この二つの要素によってすべての例の現れ方が説明された。打消推量・打消意志の助動詞の語形並存の問題が、文献の資料性のみならず、その語が表す意味というものと大いに関わっていることが示される調査結果であるといえる。

なお、「天平家」の資料性については、今後、他の言語事情を広く考察対象とすることによって、更に様々な局面から考えていく必要がある。その検討を通じ、どのような背景があつてこういった資料性を有する「天平家」が生まれたのか、その成立事情を明らかにすることが可能になると思われる。いずれも今後機会を改めて考察してみたい。

(注)

1、中田(一九六三)、此島(一九七三)等において、ジの主観的な推量・マジの客観的情勢に基づく強い推量といった意味的な相違、マジが和歌や漢文訓読系の文章に用いられないという文体的特性などが指摘されている。

2、小林(一九七七)では院政・鎌倉時代においてジの用法が固定化していく様子とマジが用法の領域を広げていく状況とを詳細に論じている。また室町時代にマジから連体形の音便形マジイおよびその変化形マイが生ずる状況については、湯沢(一九二九)、村松(一九六九)他参照。

3、湯沢(一九三六)参照。

4、清瀬(一九六八・七三・七八)、小池(一九七三・七六)、伊藤(一九七八)、菅原(一九八九)など。各氏は扱う問題点が異なり捕捉される傾向にも微妙な相違が存在するようである。またその傾向を生むに至った背景についての解釈にも違いがみられる(例えば必ずしも口訳態度の変化ばかりではなく、口訳者あるいは翻字者が複数関わっていたのではないかとみる見方など)。ただ「天平家」の本文の資料性が一貫していないという点では見解は一致している。なお、本稿は、あくまでもマジイ・マイの使い分けを問うことを第一義とし、「天平家」の成立事情を説明することには関与しない。従ってなぜそういった資料性を有するのかといった問題には一切立ち入らない。

5、既に上村(一九七三)でも天草版平家物語のマジイ・マイについて考察する際、古典平家物語での対応語との関係に注目しておられるが、原拠本として全巻を通じて日本古典文学大系本(岩波書店)を用いており、その結論には

6、近藤（一九八九）では清瀬氏と異なつた立場がとられ、特に「天平家」の卷

I・IIの1章部分について、百二十句本（斯道文庫本）系の本文が原拠本として関わっていた可能性があることが論じられている。こういった異説をとる立場もないではないが、マジイ・マイの用例を関するに、該当部分に関しては寛一本系の本文の方が対応例が多く、本稿では清瀬（一九八二）説に従う。

7、「天平家」卷IIの1章の「祇王」は高野辰之氏旧蔵本により増補されている。
8、「天平家」の引用の翻字に際しては、適宜漢字仮名交じり文に改める。原拠本の引用に際しても表記を改める場合がある。また、「天平家」の区切り符号については「・」「・」「・」を讀点に、「・」を句頭に置き換えた。

9、小林（一九七七）では、中古・中世前期の和文資料の打消推量・打消意志の助動詞の使用例数を調査されているが、そこでは連用形・補助活用・打消意志のあることや、終止形の例が占める割合が一割弱から三割程度しかないことなどが指摘されており、それらと比べて「天平家」での辞的なものとしての使用例の多さは歴然としている。

10、用例数を見る限り、巻の別に関わらずほぼ一定の使用状況にあるようであるが、頁数を勘案した場合には、マジイに比べて特に後半において使用率が低下していることが分かる（表参照。数値は一頁当りに使用される例数×一〇〇）。

| 古典平家 巻 | マジイ 使用率 | マイ 使用率 |
|-----------|------------|-----------|
| 一 | 5.9 | 5.9 |
| 二 | 20 | 8 |
| 三 | 0 | 31.8 |
| 四 | 35.7 | 64.3 |
| 五 | 5.6 | 11.1 |
| 六 | 0 | 100 |
| 七 | 8.1 | 24 |
| 八 | 0 | 9.7 |
| 九 | 23.3 | 37.5 |
| 十 | 30 | 5 |
| 十一 | 27.8 | 16.7 |
| 十二 | 25 | 8.3 |

11、小池氏の三分説の範囲に対し若干の修正を加えてみると、マジイ・マイも

はつきりとしたABA型の分布を示す。すなわち前部分を卷Iの9章までとし、後部分を卷IVの10章以降として三分した場合、前・後部分ではマジイが圧倒的に多く（マジイ対マイ＝四五対一七）、それ以外の部分、すなわち中間の部分では逆にマイの比率が極めて大きくなり（二四対六〇）、明確なABA型を示し、小池①説の三分説と分布の型を同じくすることになる。この事実の意味するところが、小池①説と関連するものなのか、あるいは偶然の現象なのか更なる検証・考察を要するところである。なお、卷Iの9章で区切る方法は、伊藤（一九七八）においても言語形式の使用分布の把握に有効であるとして試みられている。

12、ここでは「天平家」に対応を欠く「古典平家」の表現部分のものは調査の対象としない。なお、「天平家」の表現が「古典平家」において対応を欠く場合も全くないではないが、本稿の調査では、それらはすべて対象としている。

13、ちなみに古典平家でベシ系を用いて表現していたものが、「天平家」ではベシ系以外の表現に置き換えられている例を集計してみる（表5の中の②の該当例及び（参考）の項目に示される例数を加算する）。その結果、逐語訳の態度の弱い前半部に用例数が多く、後半部分に少ないことが予想されるが、前半部（巻IVの1章まで）対後半部（巻IVの2章以降）は四〇対二六であり、若干の偏向は認められるものの、さほど著しい偏在は示さない。これは、ベシにも色々な意味を表す場合があるが、各用法毎で口訳の態度が異なるためであると考ええる（例えば「禁止」を表すベカラズのような場合、巻の別に無関係に他の禁止の命令表現に置き換えられてしまうことなど）。従って、用法を分けて検討する必要性が認められ、この点については稿を改めて述べる必要があると考える。

14、連体形の例も、体言を修飾する例はまれ（マジ・マジイ各一例）で、大部分が形式体言（モノ・コト等）にかかり（他に準体言の用法がマジイ一例、マイ二例ある）、用法もかなり限定されているといえる。

15、細川（一九七九）参照。

〔引用文献〕

- 出雲朝子（一九八七）『キリシタン物の文法』（『国文法講座』5 明治書院）
- 伊藤 健（一九七八）『天草版『平家物語』本文の均質性―「御」「出」の読み分け状況―』（『高知大国文』9）
- 上村良作（一九七三）『天草版平家物語におけるマジイ・マイについて』（『今泉博士古稀記念国語学論叢』）
- 清瀬良一（一九六八）『天草版平家物語における口訳語の存立状態』（『国語学』74）
- ――（一九七三）『副詞からみた天草版平家物語本文の特色』（『国文学攷』61）
- ――（一九七八）『天草版平家物語本文の文意理解上の問題点とその発生誘因』（『国語学国文学論攷』溪水社）
- ――（一九八二）『天草版平家物語の基礎的研究』（『溪水社』）
- 小池清治（一九七三）『天草本平家物語における教本的換言法について―清瀬説への疑問―』（『フェリス女学院大学紀要』8）
- ――（一九七六）『キリシタン版天草本『平家物語』の用語に関する一問題―口訳者は複数か―』（『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』）
- 此島正年（一九七三）『国語助動詞の研究』（桜楓社）
- 小林賢次（一九七七）『院政・鎌倉時代におけるジ・マジ・ベカラス』（『国文学言語と文芸』84号）
- 小林千草（一九八七）『近代語の文法―鎌倉室町時代語―』（『国文法講座』5 明治書院）
- 近藤政美（一九八九）『中世国語論考』（和泉書院）
- 菅原範夫（一九八九）『キリシタン版ローマ字資料の表記と読み―ローマ字翻字者との関係から―』（『国語学』一五二）
- 中田祝夫（一九六三）『解釈文法雑筆』（『国文学言語と文芸』29・30号）
- 橋本進吉（一九六九）『助詞・助動詞の研究』（岩波書店）
- 細川英雄（一九七九）『天草版平家物語』における否定の表現形式と用法について（上）（『信州大学教育学部紀要』41）
- 松村 明（一九六九）『古典語現代語助詞助動詞の研究』（學燈社）
- 湯澤幸吉郎（一九二九）『室町時代言語の研究』（風間書房）
- ――（一九三六）『徳川時代言語の研究』（刀江書院）
- （平成四年九月十一日受理）